

今に蘇る太古の彩り

おおおが 大賀ハスに魅せられて



平池公園に咲く大賀ハスは、2000年以上もの長い間、地中で眠り続けていた種子が発芽し、開花したものです。悠久の眠りから目覚めたその美しい姿は、私たちの目を惹きつけ、心を癒してくれます。今月は太賀ハスと平池公園についてみなさまにご紹介します。

古代ハスの由来

昭和26年、千葉県千葉市検見川にある落合遺跡の泥の中から、古代人が使っていた丸木舟などとともに、古代のハスの種子が3粒発掘されました。そして、このうちの1粒が、植物学者でハスの権威であった故大賀一郎博士の手によって昭和27年に開花し、ピンク色の大輪の花を咲かせました。そのため、このハスは博士の姓を取って「大賀ハス」と名付けられました。このとき、大賀ハスの年代を明確にするため、近くで発掘された丸木舟の破片の年代鑑定が行われ

ました。その結果、この種子が今から約2000年前の弥生時代のものであることが判明しました。そのことから、大賀ハスは「古代ハス」や「2000年ハス」とも呼ばれるようになりました。

大賀ハスが平池公園へ

昭和50年代後半、新しい観光スポットとして整備が進められていた平池公園に、学術的価値の高い大賀ハスを移植する計画が持ち上がりました。そこで、すでに大賀ハスの分根を受けていた鳥取県農業試験場と交渉を行った結果、昭和58年、「社町から他所への譲渡禁止」という条件のもと、大賀ハスの種子15粒を譲り受けることができました。翌年の昭和59年から、当時、社中学校教諭であった丸岡道行氏の手によって発芽試験が開始され、8粒の発芽に成功し、昭和60年3

月に平池公園に移植されました。そして、昭和60年7月6日、ついに最初の大賀ハスが開花したので

太古の姿そのままに

この年には合計3輪の大賀ハスが淡いピンク色の花を咲かせ、新聞紙やテレビなどでも大々的に紹介されました。

ハスの種子は、数ある植物の種子の中でも最も生命力が強く、長命であるといわれています。そのため、2000年もの長きにわたる地中で生き延び、現在のように各地で繁殖するまでに至ったのです。なお、大賀ハスの分根先としては、和歌山系、新潟系、鳥取系が有名ですが、平成12年、西暦2000年を機に、各地の大賀ハスのレンコンが京都に集められました。それらの中で、平池公園の大賀ハスは、花形、色などで非常に高い評価を受けました。

大賀ハスに魅せられて

夏の日の早朝、大賀ハスは大輪の花を咲かせます。そして午後には花びらが閉じ、また翌朝に開きます。そして、そのまま開いていて、開花後3〜4日目には散ってしまいます。

また、開花直後の花びらは、ピンクの色が濃く、はっきりとした色合いです。そして、時がたつにつれて、少しずつ色が薄くなり透明感が増していきます。はかなくも美しい、太古の昔を思い起こさせる大賀ハスを、ぜひ間近でご覧ください。2000年前と変わらず咲き誇るその姿は、見る人の心を優しく癒してくれることでしょう。



大賀ハスは、花びらの直径が26センチ以上の大型種に分類され、毎年6月上旬から8月下旬にかけて、淡いピンク色の花を咲かせます。その姿は、見る人に古代の雰囲気を感じてくれるかのようです。



ハスは非常に生命力が強いので、そのまま植えておくと自然交配が進みます。大賀ハスは2,000年もの間、交配されなかった花（種子）が残っていたということに、大きな価値があるのです。